

中国人留学生および就学生の精神保健

—Beck Depression Inventory による比較調査—

村瀬さな子* 村瀬 澄夫²* 北畠 正義* 山内 徹*

近年、在日外国人の急激な増加に伴い、その精神保健にも次第に関心が向けられつつある。特に在日中国人に限ってみると、十年前の約4倍に増加し、なおも在日韓国・朝鮮人に次ぐ多さである。近年増加した、いわゆる永住者を除く在日中国人の特徴は、留学・就学・研修の目的で滞在している者が際立って多いことである。

そこで1992年冬、三重大学に在籍する中国人留学生と、三重県内にある日本語学校二校に在籍する中国人就学生とに、自記式うつ病尺度の一つである Beck Depression Inventory (BDI) の問診表を用いた調査を行い、両者の結果を比較検討してみた。対象者は、三重県在住の、中国人留学生の約7割、中国人就学生のほぼ全員であった。

結果は、中国人就学生の28.9%に抑うつ症状(軽度22.2%, 中等度3.3%, 重度3.3%)を、また中国人留学生の23.9%に抑うつ症状(軽度22.5%, 重度1.4%)を認めた。中国人就学生は、中国人留学生より有意にBDIの合計点数が高かった($p < 0.05$)。また、D(不満足感)、J(情動発作)、S(体重減少)の項目で、同じく就学生は、留学生より有意にBDI値が高かった。したがって、就学生という身分の不確かな中国人就学生は、留学生に比べより強く精神的負担を来しているものと思われた。

Key words: 抑うつ症状, 在日中国人学生, BDI

I 緒 言

在日外国人は、長らく、日本との深い歴史的なつながりのある、在日韓国・朝鮮人と在日中国人とで占められていた。この調査が行われた1992年当時は、120万人を越える外国人が日本に居住していたが、その約70%は、すでに70年以上も昔から日本への移住の歴史がある、韓国・朝鮮人と中国人であった。圧倒的多数である韓国・朝鮮人は、そのほとんどが永住者であるのに対して、2位の中国人は、その半数近くが、急激な日本の経済発展に伴い、近年来日した人々であった。彼らは、留学生、就学生、研修生として滞在しており、在留外国人を在留目的別にみると、留学生、就学生、研修生として滞在している在日外国人の約2/3を中国人が占めていた。異国での生活にはさまざまな問題が生じ易いが、特に留学生や就学生のような社会的に不安定な身分にある在日中国

人には、多くのストレスが作用していると思われる。しかしながら、在日中国人の精神保健についての報告はほとんどない。

そこで本研究では、三重大学でも近年とみに増加してきた中国人留学生に注目し、その精神保健上の問題を検討するため、Beck Depression Inventory (BDI) の問診表を用いた調査を行った。さらに、同じく三重県内の日本語学校二校の中国人就学生にも同様の調査を実施し、両者の調査結果を比較検討した。

II 対象と方法

1992年冬、三重大学の中国人留学生(78人)および三重県内の日本語学校二校の中国人就学生(計100人)に、中国語訳BDIによる自記式問診表を用いた調査を実施した。

調査対象の中国人集団は、中国本土ですでに高校または大学を卒業した人々である。そのうち、就学生は、日本で大学および大学院に進学しようという目的で、半年または一年間日本語を学んでいる人が主で、将来同じ三重大学の留学生となる人も多く含まれている。就学生は、法律上日本で

* 三重大学医学部公衆衛生学講座

² 三重大学医学部付属病院医療情報部

連絡先: 〒514 三重県津市江戸橋2-174

三重大学医学部公衆衛生学講座 村瀬さな子

の就労は認められていないが、生活のため、多くは皿洗い程度のアルバイトをしている。就学生の一部には、不法滞在の者も含まれていると思われる。一方留学生の中にも、生活のために、やはり皿洗い程度のアルバイトをしている人もある。要するに中国人集団は、留学生の一部の国費留学生以外は、多少ともアルバイトをして生活費を稼いでいる。

調査は無記名で、調査表を直接配布し記入後回収する方法で実施した。

使用したBDIの概略を表1に示す。各項目は、

表1 Beck Self Rating Scale

A. Sadness
B. Pessimism
C. Sense of Failure
D. Dissatisfaction
E. Guilty Feeling
F. Sense of Punishment
G. Self Hate
H. Self Accusations
I. Self Punitive Wishes
J. Crying Spells
K. Irritability
L. Social Withdrawal
M. Indecisiveness
N. Unattractiveness
O. Work Inhibition
P. Sleep Disturbance
Q. Fatigability
R. Loss of Appetite
S. Weight Loss
T. Somatic Preoccupation
U. Loss of Libido

判定基準

0-9	no depression
10-18	mild-moderate depressive symptoms
19-29	moderate-severe depressive symptoms
30-63	severe depressive symptoms

表2 被験者の内訳

グループ名	被験者数 (人)	平均年齢 (歳)	BDI 値
中国人留学生	71	31.45±4.68	5.41±5.84
中国人就学生	90	26.40±4.45	7.88±8.62

平均±S.D.

症状の程度に応じ、まったく症状のない0から重篤な3までの4段階に分けられ、各項目の合計点数10以上を、抑うつ状態あり(10-18:軽度, 19-29:中等度, 30-63:重度)と判断する。

データ解析には、Mann-Whitney U testを使用した。

Ⅲ 結 果

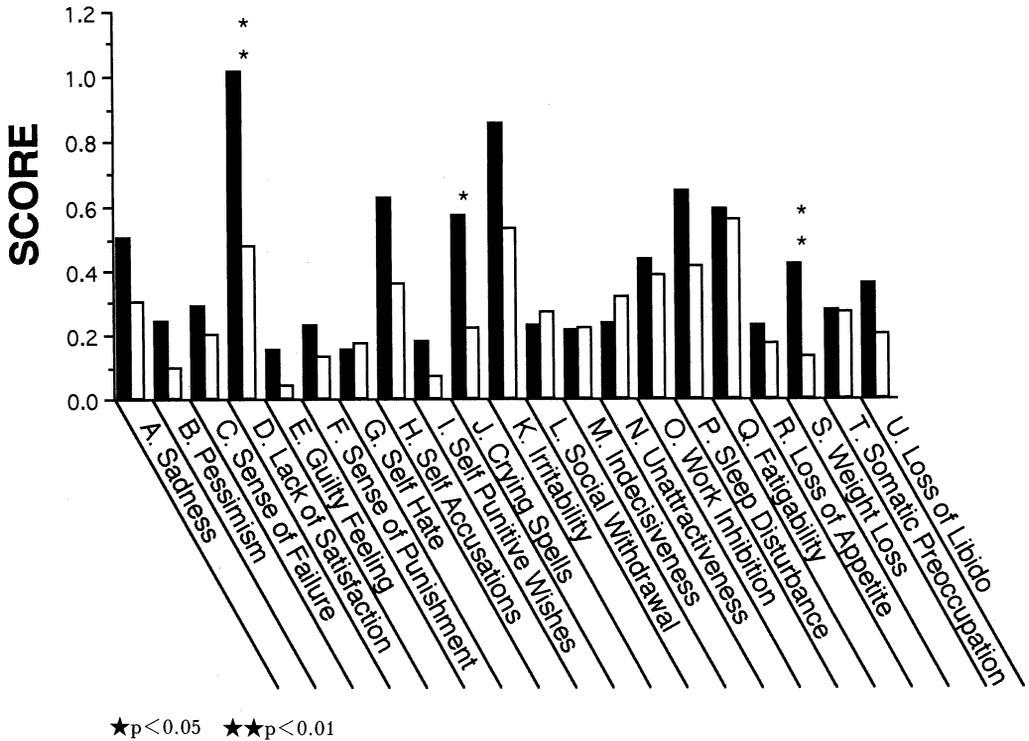
回収率は、留学生91%, 就学生90%であった。被験者の内訳を表2に示す。

BDIの点数から抑うつ状態と判断された者は、中国人就学生の28.9%(軽度22.2%, 中等度3.3%, 重度3.3%), また中国人留学生では23.9%(軽度22.5%, 中等度0%, 重度1.4%)であった。抑うつ状態の出現率には有意な差は認められなかったが、BDIの平均合計点数では、中国人就学生は7.9で、中国人留学生の5.4より有意に高かった($p<0.05$)。年齢をマッチさせるために、30歳以下の者だけを対象にして、就学生と留学生の平均合計点数を比較した場合でも、就学生の方が有意に高い値を示した(留学生:5.5, 29人, 就学生:8.5, 65人, $p<0.05$)。さらに滞在期間をマッチさせるために、滞在6ヵ月未満の者だけを対象にして両者を比較した場合にも、就学生の方が有意に高い値を示した(留学生:4.5, 11人, 就学生:9.1, 19人, $p<0.05$)。また、項目別得点でも、Dの不満足感(留学生:0.48, 就学生:1.01, $p<0.01$)、Jの情動発作(留学生:0.22, 就学生:0.57, $p<0.05$)、Sの体重減少(留学生:0.13, 就学生:0.42, $p<0.01$)の項目で、就学生は留学生より有意に得点が高くなった。両グループのBDI値の項目別得点を図1に示す。両グループでの男女差をみてみたが、合計得点に男女差はなかった(留学生:男;5.2, 53人, 女;6.0, 18人, 就学生:男;8.4, 51人, 女;7.6, 25人)。

Ⅳ 考 察

在日外国人の増加とともに、在日外国人の健康問題に関する研究がみられるようになってきたが²⁻⁴⁾、精神面の疫学調査はまだほとんど行われていない。今後ますます国際交流が盛んになると予想される中で、三重大学において、他国からの留学生に比べとりわけ多数を誇る中国人留学生と、三重県内の日本語学校2校に在籍する中国人

図1 中国人留学生(□)と中国人就学生(■)の各項目別平均BDI値



就学生に対し、初めてBDIを用いた精神医学的調査を実施した。

その結果、就学生は留学生より抑うつ傾向を示していることがわかった。ところが両グループ間には有意な年齢差が認められたため、年齢をマッチさせるために、30歳以下の者だけを対象にして平均合計得点を比較した。それでも、就学生は留学生より有意に高い値を示した。また在留外国人の精神的ストレスとしてまず考えられることは、言語や生活習慣の違う異国での生活から生じるストレスで、それが顕著な期間は、ふつう滞在直後から、異国生活に一応適応できるようになるまでの2ヵ月から6ヵ月までとされている^{5,6)}。そのため留学生に比べ滞在期間の短い就学生は、留学生より抑うつ傾向を示すことも考えられたので、両グループとも滞在6ヵ月未満の者に限って比較した。それでもやはり、就学生の方が留学生より有意に合計得点が高かった。

BDIは、自記式のうつ病尺度として、世界的に最も多く使われているスケールの一つである⁷⁾。近年では、学生に対して用いられることが多く、

その場合、学生は、一般人よりBDI値が高くなることが指摘されている⁷⁾。学生に相当な精神的ストレスを与える理由として、講義のハードなカリキュラム、およびそれに伴う時間のなさが考えられている⁸⁾。そこで、就学生の受けている講義のカリキュラムが留学生よりハードであれば、就学生がBDIの高値を示した説明ができる。

上述したように、就学生は日本語学校の学生であり、毎日授業を受けている。しかし、就学生の日本語学校でのカリキュラムは、午前のみで、日本語の授業ばかりである。彼らの中国本国での高卒以上という学歴を考えれば、日本語学校のカリキュラムが、精神的な負担をきたす程ハードとは考えにくい。実際、彼らに聞き取り調査をした限りでは、日本語学校でのカリキュラムは、なんら精神的負担となつてはいなかった。それにもかかわらず、より勉強が大変である留学生よりBDI値が高いのは、カリキュラム以外の理由と考えざるを得ない。

日本の経済発展とともに、著しく増加した在日外国人の大半は、日本の経済発展の恩恵に浴しよ

うと来日した人達である。人数的に突出している中国人についてみれば、その多くは、留学生、就学生として、日本の大学および大学院を卒業するために、勉学にいそんでいる人々である。日本の大学および大学院を卒業すると、日本で就職することが可能となる。たとえ日本で就職ができなくても、日本の大学、大学院の卒業という経歴は、本国に帰ってからの職場で極めて有利に働く。このことは、勉学への強い動機付けとなっている。

ところが、この調査が行われた1992-1993年当時は、就学生として在籍しても程なく姿を消してしまう、いわゆる不法滞在者が多かった。不法滞在者の多くは、莫大な借金と引き換えに、来日する機会を得ているため、何よりもまず日本で金を得ることが先決問題だからである。就労が本来の目的ではあるが、日本政府が、就労での在留資格を認めていないため、とりあえず就学生として在留する方法である。今回の調査で、就学生の中には、後日不法滞在者となった者も、少なからず含まれていた。彼らは、莫大な借金に見合うだけの金満国として、日本のイメージを膨らませて来日しているため、外国人に対して決して甘くない日本の現実に直面して、不安や不満足を抱いたと考えられる。不法滞在者の問題は、実際に社会問題化したため、現在では、身元引受人等のチェック体制がより改善されたようである⁹⁾。

一方、それ以外の大多数の就学生は、早く留学生になるべく、大学への入学試験の準備をしている。諸条件に恵まれた国立大学へ進学することが、特に彼らのあこがれでもある。しかし、現実問題として、日本は大学の分野でも、特別に優先して外国人に門戸を開いているわけではない。不法滞在者でない、いわゆる真面目な就学生にとって、無事に、大学または大学院に進学できるかどうかは、最大の関心事であり、精神的な不安要因となったであろう。

これ等のことは、BDIの項目別得点のうち、Dの不満足感の項目で、就学生は、留学生に比べ著しく高値であることから推察できる。

ところで、カナダのトロントの大学で行われた、BDIを用いた民族別学生の調査結果では、東アジア出身者の平均合計得点値は、8.64、アングロ・ケルト民族系学生は、7.10であった¹⁰⁾。本調査

の結果と、カナダの結果と考え合わせると、三重大大学の中国人留学生は、学生の値としては、むしろ低値であるといえる。実際、同年代の三重大大学院生への調査では、三重大大学院生（日本人）は、中国人留学生より高値を示し、就学生よりは低値を示した（日本人大学院生：BDI値；6.9、平均年齢；29.4、未公開データ）。

思春期の中国人と日本人の精神科的疾病構造は似たパターンを示すと報告があり¹¹⁾、留学生という安定な身分が得られれば、日本社会は、在日中国人集団にとって、基本的にあまり異質とは映らないのかもしれない。また、三重大大学の中国人留学生は、相互に親密に交流をしており、密な交流や情報交換のお蔭で、外国にいても孤立する者がでないのかもしれない。

これに対して、同じ中国人でありながら、就学生は、留学生よりも有意に高く抑うつ状態を認めた。これは、留学生になれば、奨学金を授与される機会があったり、その他いろいろな面で優遇されるなど、いわゆる中国人集団からみれば、将来を約束されたエリートコースに身を置いたことになるのに対し、就学生は、留学生のような身分の保証がないために、精神的により強くストレスをきたしているものと思われる。

文 献

- 1) 財団法人入管協会編. 在留外国人統計 平成5年版.
- 2) 嚴 善昭, 他. 在日中国人に対する社会医学的調査(第1報) 食生活・嗜好及び住居について. 日本公衛誌 1989; 36: 805-812.
- 3) 保知泰史, 他. 南米出身の日系人労働者の健康に関する実態調査. 日本公衛誌 1992; 39: 50-55.
- 4) 嚴 善昭, 他. ライフスタイルと成人病に関する社会医学的研究 —在日外国人と日本人との比較—. 日本公衛誌 1990; 37: 603-609.
- 5) 稲永和豊, 他. 米国における日本留学生の生活適応 —精神医学的立場よりの考察—. 精神医学 1965; 5: 21-26.
- 6) 島崎敏樹, 高橋 良. 海外留学生の精神医学的問題(その2) —A.F.S. 交換高校生の渡米中の自覚症状. 精神医学 1967; 9: 669-672.
- 7) Aaron T. Beck, Robert A. Steer and Margery G. Garbin. Psychometric properties of the Beck Depression Inventory: Twenty-five years of evaluation. Clinical Psychology Review. 1988; 8: 77-100.
- 8) Camille Lloyd, Nanette K. Gartrell. A further assess-

- ment of medical school stress. *Journal of medical education*. 1983; 58: 964-967.
- 9) 総務庁統計局編. 日本の統計. 1995.
- 10) Kenneth L. Dion and Cathy Giordano. Ethnicity and sex as correlates of depression symptoms in a Canadian university sample. *The International Journal of Social Psychiatry* 1990; 36: 30-41.
- 11) Lauren S. Kim, B. A. and Chi-ah Chun, M. A. Ethnic Differences in Psychiatric Diagnosis among Asian American Adolescents. *The Journal of Nervous and Mental Disease* 1993; 181: 612-617.

DEPRESSION SYMPTOMS AMONG CHINESE STUDENTS IN JAPAN

Sanako MURASE*, Sumio MURASE^{2*}, Masayoshi KITABATAKE*

Key words: Depression symptoms, Chinese students, BDI

The mental health of foreigners in Japan, which shows a prominent increase in number recently was studied. A major group of these foreigners are Korean and Chinese, as their countries and Japan historically had a close relationship. The Chinese population has shown large increases, quadrupling over a period of 10 years. This population is characterized by purpose of residence; with most of them visiting Japan to study.

Using the Beck Depression Inventory (BDI) self rating scale, we examined depression symptoms among two groups of Chinese students studying in Japan; 71 students of Mie university (MU) and 90 students of Japanese language schools (JLS) in Mie prefecture. BDI examination revealed that 28.9% (mild; 22.2%, moderate; 3.3%, severe; 3.3%) of Chinese JLS students and 23.9% (mild; 22.5%, severe; 1.4%) of Chinese MU students were depressed. Chinese JLS students showed significantly higher total BDI scores than Chinese MU students ($p < 0.05$). BDI scores of item D (lack of satisfaction), J (crying spells) and S (weight loss) were also significantly elevated in Chinese JLS students (D: $p < 0.01$, J: $p < 0.05$, S: $p < 0.01$). These results suggest that Chinese JLS students experience more stress than Chinese MU students.

* Department of Public Health, Mie University School of Medicine

^{2*} Department of Medical Informatics, Mie University School of Medicine